

倉敷市蔵薄田泣菫文庫 薄田泣菫日記（大正七年一月）翻刻・解説

西山康一・荒井真理亜

◎はじめに

本稿は、倉敷市蔵薄田泣菫文庫に含まれる、薄田泣菫の大正七（一九一八）年一月の日記を翻刻・紹介するものである。

まずは薄田泣菫について、簡単に説明しておきたい。薄田泣菫（本名淳介）は明治一〇（一八七七）年、岡山県浅口郡大江連島村（現、倉敷市連島）に生まれる。二七年に上京、三〇年四月に創刊された『新著月刊』の投稿募集に、薄田泣菫の名で『花密蔵難見』を総題とする詩十三篇を送り、翌月の『新著月刊』の新体詩欄の第一席に掲げられて詩壇デビューを飾る。その後も「公孫樹下にたちて」「小天地」「中学世界」明治三五年一月、「ああ大和にしあらましかば」「中学世界」明治三八年一月）といった代表作を次々に発表し、松村緑『薄田泣菫考』（教育出版センター、昭和五二年九月）によれば、「一代の名詩集」である『白羊宮』（金尾文瀾堂、明治三九年五月）をもって、「詩壇の最高峰に立つた」といわれる。しかし、その後しだいに詩興の衰えを感じ

じて詩作から離れ、大正元（一九一二）年には大阪毎日新聞（以下、大毎）社に入社して新聞編集に専念、四年に同社学芸部副部長、八年に同部長となる。芥川龍之介、菊池寛を専属社員として獲得する（大正八年）など、大正期「大毎」隆盛の一翼を担うことになる。一方、自らもコラム「茶話」「大毎」「サンデー毎日」ほかに大正四年二月二十七日、昭和五年一月二十六日まで断続的に連載）を書き続け、随筆家としても人気を誇るようになる。しかし、その間、パーキンソン氏症候群におかされ、大正二二（一九三三）年に社を退き（正式退社は昭和三年）、昭和二〇（一九四五）年故郷連島で亡くなっている。

次に薄田泣菫文庫（以下、泣菫文庫）についてだが、同文庫は泣菫の遺族らが泣菫の出身地である倉敷市に、平成一六（二〇〇四）年から同二二年まで四度にわたり寄贈した、泣菫の旧蔵資料約一七〇〇点の総称である。右に記したように、泣菫の人生が詩人として活躍したり雑誌・新聞編集者として活躍したりと、彩り豊かな面を持つことから、その旧蔵資料も泣菫自身の原稿・日記

メモ類等のほか、芥川龍之介や北原白秋、与謝野鉄幹・晶子など、近代日本を代表する多くの作家・詩人の原稿や書簡も含まれる。特に書簡の数は多く、文学者以外でもたとえば徳富蘇峰や鍋木清方、柳田國男など、幅広い分野の文化人たちから泣菫に送られた書簡が残されている。これらに關しては既に倉敷市の主導で、稿者たちも参加する薄田泣菫文庫調査プロジェクトにおいて調査がなされ、その成果の一端を『倉敷市蔵薄田泣菫宛書簡集』全三巻（八木書店、平成二六年三月―二八年三月）で公開したが、今回は泣菫自身の「日記」（一部）の調査報告となる。

◎薄田泣菫日記（大正七年一月）について

今回紹介する薄田泣菫日記（大正七年一月）は、上記した四度の寄贈のうちの第一回目（平成一六年一月）の、野田苑子氏による寄贈資料の中に含まれていたものである。書誌は以下の通りである。

形態 何らかの日記帳本体から切り取られ、この大正七年の一月分だけで現存。

寸法 縦一八・七、横一二・五釐。

丁数 一五丁（三二日分がない）。表裏使用。

筆記具 万年筆（黒）。

頁形態 記入部分は二行、界線（印刷）あり。印字部分

は頁冒頭に、日付・曜日のほか、その日の干支・六曜・九星・二十八宿に關わる記載、さらには歌句や絵・本から抜粋した文章などが印刷されている（稿末影印参照）。

形態について、切り取られた形で現存する理由については判然としないものの、おそらく本日記部分を日記形式の随筆作品などに利用しようとしていたのではないかと推測される。泣菫には大毎入社（大正元年）以前になるが、「わが日記」（『小天地』明治三四年三月）、「旧都日記」（『国民新聞』明治四一年二月二〇日）、四月二八日まで断続的に連載）など、実際の出来事に基づく日記形式の随筆作品が多い。現在確認できている限りでも十三タイトルある。一方で泣菫文庫には今回取り上げた以外にも、同じように切り取られた日記の一部分（明治三九年五月、同四〇年一月、同四二年五〜七月、年代不明三月）が存在する。こうした状況から今回取り上げる日記部分も、そうした目的でいつか使うことを念頭に切り取られて残ったのではないかと推測する。とはいえ、大正七年一月の頃を扱った日記体の泣菫作品の発表は、現在のところ確認できておらず、結局この切り部分が日記形式の随筆作品に生かされることはなかったようだ。

大正七年前後の泣菫をめぐる状況としては、前年あたりから現れてきた病（パーキンソン氏症候群）をおして、新聞編集に腕を振るっていた時期にあたる。この時期の『大毎』は、二年ほど前

から発行し始めた夕刊の充実化に、おそらく当時学芸部副部長だった泣蓮を中心に本腰を入れ出している。芥川龍之介、谷崎潤一郎、武者小路実篤など、当時の文壇流行作家を新たに登用して、夕刊第一面にその作品を掲載する。本日記でも、一月二日から上京して、芥川や武者小路ら多くの文人・芸術家を訪ねている泣蓮の様子が窺えるが、それは奇矯のお札や原稿の依頼などを目的とするものと思われる（もちろん、単に旧交を温めるだけの場合もあるが）。特に芥川との会見は、大毎社の社友として彼を招くための打ち合わせの意味もあつたらしく、『芥川龍之介全集』第二四卷（岩波書店、平成一〇年三月）所収の年譜では、この時の泣蓮と芥川の会見を「日時は不明」としているが、その日付はこの日記により明らかになる。

そして、本日記に窺える一月一九日の在京文化人による大々的な泣蓮歓迎会が象徴するように、こうした文壇作家を使った夕刊拡充の方向転換が「大毎」において可能になったのも、一つにはかつて詩人として活躍し、人望も厚かった泣蓮の存在があつて、そのことだったということも推測される。このように本日記は、大正期「大毎」の隆盛の一端を担った、泣蓮を中心とする学芸部の動き、特に同部と文壇との親密な関係性を垣間見せてくれる貴重な資料だといえよう。

◎翻刻と解説

〔凡例〕

- ・ 以下にあげる翻刻本文は、日付を除いて泣蓮の記入部分となる。印字部分は日付以外省略した。
- ・ 翻刻と引用部分を除き、漢字は現行の字体に改めた。
- ・ □は判読不能の文字、□で囲んだ文字は翻刻者の推定によるものであることを意味する。
- ・ ■は抹消部分を意味する。
- ・ 改行は原文通りである。
- ・ 特に判読できない文字の多い頁は、稿末に影印をあげた。適宜参照されたい。

〔一月一日〕

快晴出版社、祝宴、本山弔喪にこもる。宴稍さわがし
十二時帰宅、宇野賢太郎、薄田清年賀に来る

宇野新演藝の写真を集める苦心を語り

落涙す

深江氏越前の雪のなかより祝電を送り来る 能國

はいつになき大雪とにて雪見に出掛けしと覺えたり
富山房よりお伽譚出版の契約書送り来る。

〔解説〕

「本山」は大毎社長の本山彦一（一八五三―一九三二）のことであろう。ここでの「弔喪」は本山の母かの子の死によるものである（本山彦一やその母の葬儀については「一月五日」の解説参照）。

年賀に来た「宇野賢太郎」は「新演藝」の写真を集める苦心を語ることから、「新演藝」の編集者か。「新演藝」は大正五年三月から同一四年四月まで、泣蓮とも縁の深い文芸社（一月二十七日）解説参照より発行された演芸雑誌である。また、同じく年賀に訪れた「薄田清」は、泣蓮の姉アヤの長男で、泣蓮の甥にあたる。黒田えみ【評伝松村緑―明治の詩人研究に生涯をかけた女性―】（詩の会・裸足、平成一五年二月）によると、アヤが再婚した際、前夫との子どもを実家に残していったため、清は祖母の家で育ち、叔父の泣蓮が父親代わりであったという。清は岡山の工業学校を出て大阪で土木業に関わる役人になったが、小説家としての一面も持ち、長編「陽は煙らふ」（金尾文淵堂、大正二三年三月）などを刊行したが、仙台へ転勤して文筆活動を断念したという。

越前から祝電を送ってきた「深江氏」は、大毎社員の深江彦一のことであろう。泣蓮とは帝国新聞社時代から一緒で、「大正十一年版 毎日年鑑」（大阪毎日新聞社、大正一〇年一月、以下「年鑑」）によると、大正一〇年には大毎学芸部の副部長であった。

なお、「能国はいつになき大雪」とあるが、大正六年二月から各地で雪害があり、「大毎」でも大正六年二月一七日付夕刊の「妻日本雪に埋もる」という記事から年明けまで、連日大雪に関する記事が掲載されている。これらの記事には深江が提供した情報もあったことであろう。

「お伽譚」とは、薄田泣蓮作・名越国三郎画「お伽噺とお伽唄」（富山房、大正六年二月）のことであろう。

〔一月二日〕

午前年賀客来る。午後出社、晴、寒し

嶋崎、有嶋、谷崎、里見へ手紙

中條百合子のゲラ刷を東京に送る、帰途

堀野女史の大丸髻姿に會ふ

〔解説〕

この日、泣蓮が手紙を書いた「嶋崎、有嶋、谷崎、里見」は、小説家の嶋崎藤村（一八七二―一九四三）、有島武郎（一八七八―一九三三）、谷崎潤一郎（一八八六―一九六五）、里見弴（一八八八―一九八三）のことであろう。この後泣蓮は上京し、ここであげる谷崎以外の人物に会っている。そのため、この「手紙」は上京中に会見願いたい、という趣旨のものであったのではないかと推測される。

なお、前年末の十二月二十六日以降、繰り返し『大毎』朝刊に掲載された「新春の大阪毎日新聞」という記事では、ここであげられた作家たちの作品が新年の紙面をにぎわすことが予告されている（谷崎だけ二七日以降）。実際、有島武郎は「生れ出る悩み」（大正七年三月一六日）四月三〇日）を、谷崎潤一郎は「少年の脅迫」（同二月九日）一九日）、「白昼鬼話」（同五月二三日）七月一日）を『大毎』夕刊に連載している。里見淳に関しては、大正七年一月二日付「読売新聞」「よみうり抄」に、「大阪毎日新聞の爲めに短篇小説執筆中」とあるものの、同月二九日の同欄では「ジフテリアにて東京病院に入院」とあり、結局すぐには書けなかつたようである。「里見」の署名で大正一一年一月五日から三月二

二日まで『大毎』夕刊に掲載された「甘酒」がそれにあたるか（島崎藤村については「一月十六日」の解説参照）。こうしたことを考え合わせれば、この日の手紙はともかくとして、この後の上京中の会見では、これらの作品の掲載の日取りなどの相談もなされたことであろう。

中條百合子については、「一月十八日」の解説を参照。大正七年一月五日から一七日まで『大阪毎日新聞』夕刊に、「三郎爺」を連載している。「中條百合子のゲラ刷」とは、この「三郎爺」のゲラ刷であろう。「三郎爺」は大阪でゲラを作成し、東京へ送られていたことがわかる。

【一月三日】

出社

【一月四日】

辨天座にゆく

〔解説〕

弁天座は、大阪の道頓堀にあった劇場で、承応二（一六五三）年に公認された芝居名代五座の一つである。大正七年一月一日から一六日まで、弁天座では〈新国劇〉「花笠獅子」（五幕）が上演された（国立劇場近代歌舞伎年表編纂室編『近代歌舞伎年表 大阪篇 第六卷』八木書店、平成三年三月、以下「歌舞伎年表」）。泣蓮は「無愛樹」の筆名で、大正七年一月八日付『大毎』夕刊演芸欄に「弁天座の新国劇」と題して劇評を書いている。特に「め組の喧嘩」や「勸進帳」の筋やら、氣持やらを取込んで、大ざつぱに夫を運んである劇だが、それでも澤田の銀造には何処かに争はれぬ天分も見えて、こんな事をさせて置くには惜しいやうな氣持がする」などと、澤田正二郎ほかの俳優たちの演技についても細かいところまで目配りした批評を提示しており、記録としても重要である。

【一月五日】

〔解説〕

「本山」は「二月一日」の解説でも触れたように、本山彦一のことであろう。明治二二年に大毎社の相談役となり、同三六年より大毎社長を務めていた。大正六年二月三〇日、本山の母かの子が死去したため、本山は新年も一日から「弔喪」にこもっていた。そして、この日葬儀が行われたわけだが、「大毎」でも前年末のかの子の死の直後から連日報道がなされ、この翌日の「本山かの子刀自葬儀 近來稀有の盛儀」という記事では、大阪近郊だけでなく、京都や神戸からも会葬者があり、盛儀であったことを伝えている。

〔一月六日〕

新年宴會、午後三時より堺卯にゆく

〔解説〕

「堺卯」は堺卯楼のことであろう。堺卯楼は江戸時代から続く老舗料亭であった。道修町に本店、平野町に支店があり、宴会をはじめ会合や講演等に使われた。明治三三年七月に泣菫を詩壇に導いた批評家後藤宙外が関西来遊した時にも、在阪文士、画家、新聞記者らが堺卯楼で招宴を聞いており、泣菫も出席していた(後

藤宙外「明治文壇回顧録」昭和二年五月、岡倉書房)。

〔一月七日〕

浪花座見物 鷹次郎トウジロウに會ふ

〔解説〕

浪花座は、大阪の道頓堀にあった劇場で、承応二(一六五三)年に公認された芝居名代五座の一つである。大正七年一月二日から二四日まで浪花座では、一番目「国姓爺合戦」(二三卷)、中幕新作「春栄」、二番目「夕ぎり伊左衛門」(三卷)、大喜利「奴風廓春風」が上演された(歌舞伎年表)。

泣菫が会った「鷹次郎」とは、歌舞伎役者の初代中村鷹治郎(一八六〇〜一九三五)のことであろう。この時の演目のうち、鷹治郎は「国姓爺合戦」では五常軍甘輝、「夕ぎり伊左衛門」では藤屋伊左衛門を演じた。泣菫はやはり「無憂樹」という筆名で、大正七年一月九・一〇日付「大毎」夕刊の演芸欄に「浪花座の一月興行」と題して劇評を書いている。特に鷹治郎については、「国姓爺合戦」の「鷹治郎の甘輝は恰幅はいかにも立派であるが損な役柄である上に、幾らか細かい味も出さうと骨を折つてゐるので却つて役を裏切るやうな点もないではない」と評し、しかしそれは演目が今の俳優に合わないからだと指摘している。泣菫の歌舞伎に対する豊かな知識と経験とが窺える劇評といえよう。

【一月八日】

中座にゆく 初めの演 相嶋菊池二氏来る後のち

浅井氏来也

〔解説〕

中座は、大阪の道頓堀にあった劇場で、承応二（一六五三）年に公認された芝居名代五座の一つである。大正七年一月一日から二十七日まで中座では、曾我廼家五郎一派によって《喜劇》第一「新年会」、第二「元の古果」、第三「春雨駕」、第四「海辺の松」、第五「女蛇目」が上演された（《歌舞伎年表》）。やはり泣菫は「無憂樹」という筆名で、大正七年一月一日付「大毎」夕刊演芸欄に「中座の曾我廼家劇」と題し、上記の五幕それぞれにおける俳優の演技について、微に入り細を穿ち批評を加えている。

「相嶋」は相嶋勘次郎（一八六八～一九三五）のことであろう。相嶋は「虚吼」の号で俳人としても活躍したが、明治二三年に大毎社に入り、編輯主任、副主幹、顧問を務め、のちに衆院議員となる。「年鑑」によると、大正一〇年には大毎編集局の顧問であった。「菊池」は菊池幽芳（一八七〇～一九四七）のことであろう。明治三四年に大毎社に入り、「己が罪」（明治三年八月一七日～三年五月二〇日）、「乳姉妹」（明治三六年八月二四日～二二年二六日）を「大毎」に発表、家庭小説の先駆をなした。「年鑑」

によると、大正一〇年には大毎編集局の顧問であった。

「浅井」は浅井任三郎のことであろう。「年鑑」によると、大正一〇年には大毎印刷部の部長であり、泣菫とともに出版部の委員も兼務していた。

【一月九日】

文楽座にゆく 越路寺子屋の半を過ぐる頃 高山

より電話来り 柳川急変死去の事を報じ来る

〔解説〕

文楽座は、明治一七年に大阪御霊神社の境内で旗揚げされた人形浄瑠璃の一座である。やがて他の浄瑠璃は衰退し、御霊文楽座だけが残った。文楽座の大正七年一月の演目は「菅原伝授手習鑑」「筑紫配所」「野崎村」であった。泣菫は「無憂樹」という筆名で大正七年一月二十二日付「大毎」夕刊演芸欄に「文楽座の手習鑑」と題し、劇評を書いている。文楽座は前年二月から旧屋を改装し、新年に開館した。泣菫は「この新しい劇場で人形芝居を見るのは、少し明る過ぎて、幾分時代錯誤の感じが仕ない事もないが、然し何といつても新しいものは気持ちが良い」とその感想を記している。また、各演目についても、太夫から人形遣いまで筆を費やして丁寧に批評している。

「柳川」は小説家の柳川春葉（一八七七～一九一八）のこと

あろう。春葉は、大正元年八月一七日から翌二年四月二四日まで「大毎」に連載した「生さぬ仲」をはじめ、家庭小説で人気を博した。「柳川急変死去の事」とあるが、大正七年一月七日付「大毎」

朝刊に「春葉氏発病」という記事が掲載され、さらに一月一〇日付夕刊には「春葉氏危篤 親戚門生一同詰切る」と題し、春葉の病状とともに「急報に接し親戚、門生一同を始め泉鏡花、徳田秋声、安田善三郎、角田真平、伊原晋々園、武内桂舟、池田輝方、齊藤松洲、岡本靈華等の見舞客相^{まが}踵ぎ一同悲愁に閉されつ、あり」と報道されている。そして、一月一〇日付朝刊に「予て急性肺炎にて木澤病院に入院中なりし小説家柳川春葉氏は薩子夫人を始め近親の厚き看護の功もなく九日午後四時三十五分遂に逝去せり」という死亡記事が掲載された。また、泣堇自身も一カ月ほど後の、大正七年二月一九日付夕刊の「茶話」（春葉の弟子）で春葉の死について語っている。こうした事細かな報道や泣堇の対応は、「大毎」あるいは泣堇と春葉の関係の深さを象徴しているといえよう。

春葉の訃報を知らせた「高山」は高山憲之助のことであろうか。「年鑑」によると、大正一〇年には大毎印刷部の助役であった。

【一月十日】

（記載なし——稿者注）

【一月十一日】

夜汽車にて東京行 浅井桜田二氏同行

米原あたり大雪

晚 雪の富士を見る

〔解説〕

泣堇の上京に同行した「浅井」と「桜田」とは、浅井任三郎と桜田松太郎のことであろう。浅井任三郎は【一月八日】の解説を参照。桜田松太郎は「年鑑」によると、大正一〇年には大毎営業局長であり、泣堇や浅井任三郎とともに出版部の委員も兼務していた。

また、「米原あたり大雪」とあるが、泣堇が上京する二日前の一月九日付「大毎」夕刊に「攪乱されたる東海道列車」と題し、大雪によって東海道線の不通なったり延着が発生したりしたことを伝える記事が掲載されている。また、一日付朝刊には九日に撮影された「米原付近の除雪作業」という写真も載っている。こうした情報は当然泣堇の耳にも入っていたと思われ、様子を見つづの上京だっただとも思われるが、だとしても大雪直後ということ、この上京が強行軍で行われたことが想像される。

【一月十二日】

東京着午前九時 東日倶楽部にゆく

電話にて金尾に通じ、午後三時頃東日にゆく
夜精養軒にて宴會 帰途 相嶋奥村桜田、春
秋淺井など、烏蘭茶居にゆく
夜道を迷ふ

〔解説〕

「東日」こと東京日日新聞（以下、東日）社は、明治五年に「東日」を創刊した日報社を前身とするが、明治四四年に大毎社が日報社を合併して成立（正式には大阪毎日新聞社東京支店東京日日新聞発行所）。なお、大正七年一月一八日付「読売新聞」「よみうり抄」によると、泣菫が「数日前か上京、毎日倶楽部に逗留中の氏は兩三日中に帰阪する筈」とあり、上京の間、泣菫は「東日（毎日）倶楽部」に滞在していたと推定される。

泣菫が上京早々電話をかけた「金尾」は、金尾種次郎のことであろう（金尾種次郎については、「一月十七日」の解説参照）。

「精養軒」は東京で最初の西洋料理店築地精養軒のことであろう。当時は、京橋区采女町（現、中央区銀座）にあった。大正七年一月一三日付「東日」の「我社の新年宴会」という記事に、「わが社の新年宴会は吉例によつた昨夕五時から築地精養軒に於て催された」とある。

「相嶋」は「二月八日」の解説で触れた相嶋勘次郎のことであろう。また、「奥村」は奥村信太郎（一八七五―一九五一）のこと

とであろう。奥村信太郎は、明治三四年に大毎に入社し、「年鑑」によると大正一〇年には大毎編集局の副主幹であった。「桜田」・「淺井」は前日の解説で触れた桜田松太郎と淺井任三郎のことであり、「春秋」は春秋原在文のことであろう。「年鑑」によると、春秋は大正一〇年には東日学芸部の部長であり、大毎連絡部の部長を兼任していた。「烏蘭茶居」は「烏蘭」を「ウーロン」と読んでよいのであれば、当時銀座尾張町にあった台湾喫茶店（通称ウーロン）のことか。松崎天民「銀座」（銀ぶらガイド社、昭和二年五月）によると、多くの文人・有名人が出入りし、「ウーロン茶の他に、四五種の洋酒もあつたし、美味しい洋食も食べさせたもので、お鈴、お幸など云ふ美人の女給」を置いていることも知られていたという。

〔一月十三日〕（稿未影印①）

朝来與謝野夫妻を訪ふ、折柄歌の會あり

とも閉る 石井柏亭 澁川玄耳、吉井勇、久保田

万太郎、堀口大宇、園子の娘婿金尾春草など列席、

夜更けて帰宅

〔解説〕

「與謝野夫妻」は、与謝野鉄幹（一八七三―一九三五）とその妻・晶子（一八七八―一九四二）のことであろう。鉄幹は明治三二年

に新詩社を設立、翌年「明星」を創刊して多くの新進作家・詩歌人を輩出した。夫妻と泣菫の關係は古く、特に鉄幹とは明治三三年一月の「国文学」に鉄幹が「春笛集（泣菫君を想慕して）」という詩を書き、それに対して泣菫が「鉄幹君に報ゆ」（「ふた葉」明治三三年一月）で応じた時から交流が始まり、明治三四年に鉄幹が西下した際、初めて泣菫と会うことになる。同年、鉄幹は晶子と結婚し、以後泣菫とは家族ぐるみの付き合いが続いた。

この日の「歌会」については、大正七年一月三日付「時事新報」「文芸消息」に「新詩社新年歌会」とあり、鉄幹宅で行われたことが記されている。洋画家の石井柏亭（一八二一―一九五八）、新聞記者の渋谷玄耳（一八七二―一九二六）、歌人・劇作家・小説家の吉井勇（一八八六―一九六〇）、小説家・劇作家・俳人の久保田万太郎（一八八九―一九六三）、詩人・仏文学研究者・翻訳家の堀口大学（一八九二―一九八二）、おそらく高浜虚子の長女真砂子の夫である真下喜太郎（一八八八―一九六五）、そして金尾種次郎（二月十七日）の解説参照、「春草」は金尾の号の一つ）などが、その場にいたことがこの日記からわかる。

【一月十四日】

桜田、浅井二氏と共に歌舞伎座にゆく

「花の御所」、「野崎村」、「國性爺」など

野崎村最もよろし

〔解説〕

歌舞伎座は、明治二三年に東京市京橋区木挽町（現、東京都中央区銀座）に開設された。外観は洋風、内部は日本風の拾遺りだったのを、明治四四年に純日本式の宮殿風に改築した。大正七年一月の演目は「花の御所」、「国姓爺合戦」、雀右衛門襲名狂言新版歌祭文「野崎村」、初音里恋仮名文「寿鞠猿」であった（東京朝日新聞）大正六年二月二十六日）。なお、中村雀右衛門（一八七五―一九二七）が前年一〇月に、三代目としての襲名披露を大阪浪花座でしたが、この大正七年一月の東京歌舞伎座における彼の公演は、襲名後初の東上であった。そのため、襲名披露の口上も設けられたという。泣菫が「最もよろし」と評している「野崎村」のお光は、この雀右衛門の当たり役であった。

【二月十五日】

高安を訪ふ 一緒に中華に午餐を喫し午後

丸善にゆく、歸宅 夜櫻田浅井二氏を停車場

に見送る

〔解説〕

「高安」は、詩人・劇作家の高安月卿（一八六九―一九四四）のことであろう。詩作の傍らイブセンヤドストエフスキーの作品

を翻訳していたが、『江戸城明渡』（博文館、明治三十六年五月）等によって、劇作家としての地位を確立した。泣菫とは明治三三年頃から親交を結び、特に明治三六年に泣菫が京都へ移ってからは泣菫にとつて「一番の親友だつたから、高安さんからの手紙は全然見せてもらえなかつた」という（満谷昭夫『泣菫残照』創文社、平成一五年一月）。ちなみに、泣菫文庫に残る月郊の書簡は約三五〇通と最も多い。

また、泣菫と月郊はしばしば洋書の情報交換や貸し借りをしており、ここでも二人で「丸簞」に洋書探しに出かけたりしたのかもしれない。

〔二月十六日〕

朝寒し 藤村 孤蝶を訪ひ 夜に入りて金尾を訪ふ

電話にて横山大観をよぶ 不在

■ ■ ■
結城を玄文社に訪ふ 相撲に行きしとて不在

〔解説〕

「藤村」は島崎藤村（一八七二～一九四二）のことであろう。この時の藤村との会見については、泣菫が後年「初対面か二度目か」（『サンデー毎日』昭和六年一月一日）で語っている。この会

見が初対面か否かについての泣菫と藤村の「いひ争」いが、そこでは主に描かれているのだが（実際は泣菫のいうように初対面であつたらしい）、そこには同時に「私には新聞社から頼まれたさし当つての用事があつた」ともあり、社命を帯びた訪問であつたことがわかる。藤村は既に「芝の客舎にて」（随筆）をこの年一月六日付「大毎」朝刊に掲載しているが、そのお礼とさらなる寄稿依頼をしたか。なお、「二月二日」の解説で触れた「新春の大阪毎日新聞」では、藤村の「短編小説」掲載の予告が出ている。ただし、結局この後藤村の小説が「大毎」に掲載された形跡はない。

「孤蝶」は英文学者・翻訳家・随筆家の馬場孤蝶（一八六九～一九四〇）のことであろう。この時期孤蝶は「東日」に「贅弁」という随筆を掲載したり（一月一六～二〇日）、また同紙の「園詩」募集」という投稿募集企画の「幹事」だつたりするため、そのあたりのことが話題にのぼつたか。横山大観（一八六八～一九五八）は言わずと知れた日本画壇の中心人物であるが、この時期「大毎」に大観の「海辺の松」（二月八日・朝刊）などの画が掲載されたり、金尾文淵堂刊の「東海道五十三次絵巻」（大正四年九月）に画を寄せていたりしたことから、泣菫と金尾の間で大観を呼ぼうという話になつたのではないか。だが、大正七年一月一日付「説売新聞」「よみうり抄」には、大観が「十日出發京都に向へり」とあり、この時大観は関西にいらつたらしい。「結城」は

結城礼一郎のことであろう(『玄文社』ともに「二月二十七日」の解説参照)。

【二月十七日】

午前金尾来る 末廣にて午餐を喫す

午後有嶋武郎里見彈を訪ふ 里見彈

■風邪にて臥床中、二家にて讀賣記者加藤謙に會ふ 前日、藤村方にも會ひし人なり
夜銀座にて食事したむ

〔解説〕

「金尾」は、金尾文淵堂の主人金尾種次郎(一八七九―一九四七)のことであろう。大阪で金尾文淵堂を継ぎ、泣菫の『蓉笛集』(明治三二年一月)を出版した。それをきっかけに生涯にわたる親交が結ばれ、泣菫は金尾が出す雑誌「小天地」(明治三三年一月―三六年一月)の編集を担当するようになる。しかし、経営苦から金尾は明治三八年に大阪の店をたたんで上京し、この頃は東京市麹町区(現、東京都千代田区)平河町で開業していた。「末廣」についてはいくつか候補があるが、上京中の泣菫の行動範囲からいえば、日本橋下横町の烏鶺屋末広本店であろうか。『東京食通番付』(豊文館、大正六年二月)でも多く取り上げられる有名な店で、大正八年一月一日の成瀬正一帰朝歓迎会(大正八年一月

一九日付「読売新聞」朝刊に、その取材記事・写真が掲載)など、作家たちにも利用されていたようである。

有嶋武郎・里見彈については「二月二日」の解説を参照。前日の藤村との会見と続けて、泣菫は加藤謙という読売新聞の記者と出くわしたようである。この加藤謙という人物については、読売新聞記者ということ以外ほぼ未詳であるが、先の成瀬正一帰朝祝賀会の記事には、実は加藤もおそらく記者としてその会に参加していたことが記されている。文学者に関わる場面に出現しているところから、おそらく当時の読売新聞の文芸部記者だったのでないか。泣菫にとってはライバル的存在ということになる。

【二月十八日】(稿末影印②)

朝満谷を訪ふ 中條百合子 高安訪問
夜に入りて■園園今井に玄文社の結城服部□□に御馳走にあふ

〔解説〕

「満谷」は洋團家の満谷国四郎(一八七四―一九三六)のことであろう。満谷と泣菫の関係は古く、そもそも二人は岡山県尋常中学校で二学年差の先輩後輩であったが、本格的な交流は二人が上京して漢学塾開塾書院で机を並べた時だという。これをきっかけに、「白玉姫」(金尾文淵堂、明治三八年六月)や「白辛宮」(同、

明治三九年五月) ほか、多くの泣菫詩集の装幀や挿絵が瀧谷の手によるところとなる。二人の交流については、泣菫自身の文章「詩集の後に」(『泣菫詩集』大阪毎日新聞社、大正一四年二月)や、松村緑前掲書、羽原卓也・西山康一・山本秀樹「倉敷市蔵薄田泣菫文庫 瀧谷国四郎書簡 翻刻・解説」(『岡大國文論稿』平成二六年三月・二七年三月)を参照されたい。

中條百合子は後の宮本百合子(一八九九〜一九五二)で(「中條」は旧姓)、大正五年九月、一七歳で「貧しき人々の群」を「中央公論」に発表し、文壇に彗星の如く登場した。この当時は天才少女として注目を浴びていた時期であり、泣菫としてはその注目されている中條に、「大毎」で大いに活躍してもらうことを期待しての訪問だったろう。実際、「二月二日」の解説で触れた「三郎爺」のみならず、「加護」(大正九年八月一七日〜二八日)という小説も「大毎」夕刊に載せている。その他「高安」は「二月十五日」の解説に触れた高安月郊のことであろう。「結城」は「二月二十七日」の解説で触れた結城礼一郎、「服部」は同じく当時玄文社にいた服部普白のことか。「烏森今井」については不明だが、烏森に隣接する銀座出雲町にあった西洋料理店今井のことか(前掲「東京食通番付」参照)。

【一月十九日】

朝田端に芥川龍之介を訪ふ 夜は鴻の巢に友

人の招宴あり 主人側 与謝野夫妻、高安参郎、金尾思西、吉井勇、長田幹彦、生田葵、沖野岩三郎、徳田秋声、児玉花外、北原白秋、久保田萬太郎、高村光太郎、濱尾〇屋、森田恒友、安成二郎、結城礼一郎、松崎天民、堀口大学の十氏なり 児玉氏大に酔ふ

〔解説〕

芥川龍之介(一八九二〜一九二七)は、この泣菫との会見後、大正七年一月三一日付泣菫宛書簡に「御上京の節は 折角御たづね下さつたのに何の御もてなしもなく甚失礼しました あの夜韻松亭で久保万にあひ鴻之巢行きをす、められました が 三士会へ来る人に僕の学校の用むきを通へる必要がありましたから 欠席しました」と書いている。そして、さらに「その節御話しの件もよろしく願ひます」とも記しており、この書簡の言葉と本日記の記述を総合すると、「その節」すなわちこの一月一九日の会見が大毎社社友として芥川を招くための相談であったことがわかる。「鴻の巢」は当時京橋区南伝馬町(現、中央区京橋)にあったフランス料理レストラン鴻乃巢のことであろう。作家たちに愛され、この一週間はど前の一月二三日には日夏耿之介「転身の頌」(光風館書店、大正六年一二月)の出版記念会が開かれている。その他、ここにあげられた人物について簡単に触れておくと、

与謝野夫妻は「一月十三日」の解説を参照。「高安參郎」は「一月十五日」の解説で触れた高安月郊のことで、本名は三郎だが「參郎」とも署名した。「金尾思西」は「一月十七日」の解説で触れた金尾種次郎であり、「思西」は金尾の号の一つである。吉井勇については「一月十三日」の解説を参照。また、長田幹彦（一八八七〜一九六四）、生田葵（葵山、一八七六〜一九四五）、沖野岩三郎（一八七六〜一九五六）、徳田秋声（一八七一〜一九四三）はすべて小説家。児玉花外（一八七四〜一九四三）は詩人。北原白秋（一八八五〜一九四二）は詩人・歌人。久保田万太郎は「一月十三日」の解説を参照。高村光太郎（一八八三〜一九五六）は詩人・彫刻家。森田恒友（一八八一〜一九三三）は洋画家。安成二郎（一八八六〜一九七四）は歌人・ジャーナリスト・小説家。結城礼一郎は「一月二十七日」の解説を参照。松崎天民（一八七八〜一九三四）はジャーナリスト。堀口大学は「一月十三日」の解説を参照。多くは古くから泣蓮と付き合ひのある者たちであった。判読できなかった「浜尾」という人物の部分については、下の影印を参照されたい。



〔一月二十日〕（稿末影印③）

朝我孫子に武者小路氏を訪ふ 志賀直哉④
あり

夜蘭日の松内 桑の、原田、困園と
四隣にのむ

〔解説〕

「武者小路氏」とは、白樺派の作家武者小路実篤（一八八五〜一九七六）を指す。大正五から七年まで千葉県我孫子町（現、我孫子市）に住んでいたが、泣蓮はこの我孫子の実篤の家まで直接行って、原稿依頼をしたのではないかと推察される。しかし、この時、武者小路は病床にあつたらしい。大正七年一月二八日付薄田泣蓮宛武者小路書簡（前掲「薄田泣蓮宛書簡集 作家篇」）には、「先日は遠い処を来て戴いたのに病床で失礼いたしました。幸全快いたしました。感想でよろしくは来月末頃に出さして戴けると思ひます」とある。実際、実篤はこの後「大毎」夕刊に「ある園」（大正七年七月二二〜二一日）という「新しき村」運動に繋がる文章を連載している。

志賀直哉（一八八三〜一九七二）は実篤より少し早く、大正四年から七年半ほど我孫子に住み、執筆活動を行っていた（志賀と泣蓮のやり取りについては西山康一・庄司達也「志賀直哉と『大阪毎日新聞』——「或る男、其姉の死」『暗夜行路』背景考——」（『岡大國文論稿』平成二五年三月）参照）。その他、柳宗悦やバーナード・リーチといった白樺派関係者も当時我孫子に移住しており、我孫子は当時白樺派の拠点の一つとなっていた。

「東日の松内 桑の、原田、木造」とは松内則信、桑野正夫、原田信造、木造龍三のことだろうか。「年鑑」では大正一〇年時点で、松内則信は東日編輯局副主幹、桑野正夫は大毎休職員、原田信造は東日社会部、木造龍三は大毎社会部と記載されている。「竹葉」は（そう読んでよいのなら）鰻・日本料理の有名店竹葉亭のことか（松崎天民『東京食べある記』誠文堂、昭和六年一月参照）。

【一月二十一日】

朝与謝野を訪ひ 夜東京を出発す

与謝野夫妻、茅野夫人、金尾見送りに来る

小林政治氏もまた

茅野氏はさきに宿所をも訪問せられたり

〔解説〕

「茅野夫人」は、歌人の茅野雅子（一八八〇〜一九四六）のことであろう。同じく歌人で詩人・独文学研究者でもある茅野蕭々（一八八三〜一九四六）の妻である。雅子は明治三三年から鉄幹の新詩社に加わる。晶子と山川登美子との合著歌集「恋衣」（本郷書院、明治三八年一月）の巻頭には、「詩人薄田泣菫の君に捧げまつる」という献辞が掲げられている。蕭々に関しては、鉄幹の明治四一年八月二九日（推定）泣菫宛書簡（前掲『薄田泣菫宛

書簡集 詩歌人篇）に、京都の第三高等学校に赴任した蕭々を泣菫に紹介するような言葉が見られることから、この頃より関係が出来たか。大正七年の頃には、蕭々の慶応義塾赴任のため、茅野夫妻は東京にいた。

小林政治（一八七七〜一九五六）は大阪の実業家で天眠の号を持ち、関西の草分け的文芸誌「よしあし草」の創刊（明治三〇年七月）に尽力し、「離破船」（『少年文集』明治二九年四月）などの小説も書いた人物である。明治三六年には天佑社を立ち上げ、以後出版事業にも携わる。与謝野夫妻の後援者としても知られる。

【一月二十二日】

十時歸宅 菊池氏三男浩氏の計を聞き

見舞にゆく

三時出社 相嶋奥村二氏に話す

夜再び菊池氏にゆく

〔解説〕

「菊池氏」は菊池幽芳のことであろう（菊池幽芳については【一月八日】の解説参照）。幽芳と泣菫の関係は古く、明治三三年頃、金尾種次郎を介して知り合ったと思われる。泣菫らの編集した『小天地』（金尾文淵堂、明治三三年一〇月創刊）で幽芳は賛助員になり、一方泣菫は同年一二月に菊池のいた大毎社に入社している。

その後、「小天地」編集専念のため、泣菫はいったん大毎社をやるが、大正元年に再入社し、以来幽芳の下で学芸部とともに盛り立てていく。その後も家が近いこともあり、晩年まで付き合いが盛んで、泣菫の墓の墓碑銘は幽芳の筆によるものとなっている。

その他、「相嶋」は相嶋勘次郎（一月八日）の解説参照、「奥村」は奥村信太郎（一月十二日）の解説参照のことと思われる。

【一月二十三日】

朝菊池氏にゆく 西の宮火葬場に葬式を了へたる
は午後一時、同三時出社。

【一月二十四日】

東京で世話になつた人に礼状を出す

【一月二十五日】

日曜附録バ切の日として忙かし お伽はなしの講
に又手を入れて名越君にわたす 名越君の

画もぞんさい也

名越君に第二茶話の表紙画を頼む

〔解説〕

「大毎」の「日曜附録」は明治中期からあったが、アメリカの

日曜新聞に倣って時事解説から娯楽・スポーツ記事等を盛った写真画報を付す、という日曜附録拡張計画が「大正八・九年のころから幹部の間にあった」。これが後の「サンデー毎日」創刊（大正一一年四月）に繋がるのだが、一方で日曜附録の編集は学芸部が他の仕事とともに担当したため、その拡張は大きな負担となり、結局「サンデー毎日」が出て暫くした頃（大正一二年一月）学芸部は整理・解体されたという（以上、「毎日新聞百年史」毎日新聞社、昭和四七年二月）。この日記を見ると、大正七年の段階でも既に日曜附録の仕事が負担だったことが窺えて興味深い。

また、「お伽はなし」は「一月一日」の解説で触れた「お伽噺とお伽唄」のことではなく、この時期の「大毎」日曜附録で連載されていた「オトギバナシ」のことであろう。「名越君」は挿絵画家の名越国三郎（一八八五〜一九五七）のことで、「年鑑」によると大正一〇年には大毎学芸部に所属していた。「オトギバナシ」には署名がないため、誰の手によるのか不明であったが、この日記の記述から泣菫作・名越国三郎画であることがわかる。なお、ここでいわれる「オトギバナシ」は、二七日付夕刊に掲載された「樵夫と鬼」にあたり、そこには四枚の名越国三郎の挿絵が付されている。「第二茶話」については、「一月二十七日」の解説を参照。

【一月二十六日】

與■謝野氏にお伽噺をおくる

〔解説〕

「こ」での「お伽噺」は、一月二日の解説で触れた前年二月刊行の「お伽噺とお伽唄」（富山房）のことであろう。もちろん、これまでの長い付き合いのためであろうが、泣蓮としては上京中、最初から最後までお世話になった与謝野鉄幹・晶子に、御礼の品として贈る意味もあつたのではないか。また、「お伽噺とお伽唄」の内容を考えれば、与謝野夫妻の間には当時まだ幼い子供たちがたくさんいたために贈つたのかもしれない。

【一月二十七日】

晴 寒し 結城に手紙した、む 第二茶話集の目目

について相談。

子供三人に西洋の郵便切手を分けてやる 檀と桂と

切手について競争す

妻より与謝野夫人へ手紙す

〔解説〕

「結城」はジャーナリスト結城礼一郎（一八七八―一九二九）

のことであろう。泣蓮との関係は明治三〇年代中頃からかと思われ、四四年「帝国新聞」創刊の際には、主幹を任された結城は泣

蓮を文芸部長に招聘している。この大正七年の頃には、結城は玄文社の主幹を務めていた。玄文社は大正五年に、化粧品メーカーの伊東胡蝶園の二代目社長伊東栄が創めた出版社である。「第二茶話」は大正七年四月、この玄文社より刊行された「後の茶話」のことかと思われる。「第二茶話」すなわち「後の茶話」が結城の玄文社から出されることになったため、手紙でその「目目について相談」したのだろう。だとすれば「第二茶話」が「後の茶話」というタイトルに決まったのは、結城の提案によるか。少なくともこの間の手紙のやり取りの中で、そのようになっていったと推測される。

「檀」は長女のまゆみのことであり、したがって「子供三人」とは、長女のまゆみ・長男の桂・次女の和子のことであろう。

「妻より与謝野夫人へ手紙す」というところからは、与謝野夫妻との家族ぐるみの付き合いが窺える。たとえば、与謝野夫妻の次男・秀の名前が泣蓮の命名によるのもその一つであろう。

【一月二十八日】（稿末影印④）

曇、稍暖かなり 満谷國四郎、沖野岩三郎（富士見川六の七）

高安月郊、□□□□園より來書

十一 ■時新聞社にゆく 第二茶話の原稿整理

小平女史児玉花外の宿所を訊く 縁談の件 〇〇〇〇

幹部會。クリエーチヴ・クリチシズムをよむ

夜例の通り子供三人に西洋の郵便切手をつつ 獨逸

のもの問題になり 檀と桂と笹をひく

次ぎの日曜に六甲登山の會あり

〔解説〕

滴谷国四郎については「一月十八日」の解説を、沖野岩三郎については「一月十九日」の解説を、高安月郊については「一月十五日」の解説を参照。「第二茶話」については「一月二十七日」の解説に記したが、この日もその整理に追われているようだ。

小平初子は『年鑑』によると、大正一〇年には大毎連絡部に所属している。『泣菫詩集』（大阪毎日新聞社、大正一四年二月）収録の「詩集の後に」には、「小平初子氏は一部原稿の寫しと口述速記とに力を藉して下さつた」と書かれおり、晩年まで泣菫とは親しい付き合いがあったようである。泣菫文庫にも、小平からの書簡五通が残っている。児玉花外については「一月十九日」の解説を参照。泣菫との付き合いは古く、知人の平尾不孤を介して、花外が明治三三年頃から金尾文淵堂の雑誌『ふた葉』や『小天地』に詩を掲載するようになり、同じ頃金尾文淵堂の二階で『小天地』の編集をしていた泣菫とも知り合うことになったらしい。

「子供三人」や「檀と桂」については、「一月二十七日」の解説を参照。また、ここで泣菫が読んだという「クリエーチヴ・クリチズム」は、J・E・スピンガン（J・E・Spingarn）の

“Creative Criticism: Essays on the Unity of Genius and Taste”
(Henry Holt and Company, 1917) のことか。

〔一月二十九日〕

〔記載なし——稿者注〕

〔一月三十日〕

〔記載なし——稿者注〕

〔付記〕

本稿執筆にあたり、貴重な所蔵資料の利用を御許可下さいました倉敷市文化振興課、また調査に御協力いただきました薄田泣菫顕彰会三宅昭三様に記して感謝申し上げます。

また、本稿は平成二八年度科学研究費補助金（課題番号16K02407）薄田泣菫文庫の全審解明に向けての総合的研究「明治・大正文壇の思想的水脈として」の助成を受けたものである。

（にしやま こういち 岡山大学大学院社会文化科学研究科准教授）

（あらい まりあ 相愛大学人文学部准教授）

① 1月13日

月一 日三十

日曜 中休

甲子五月朔日 雑多の赤
全額送附(十八番通)

年禮にすこの野路の氣晴れたり 子 東

吉一正三致九果 四 一自四致五果自七赤八白

朝舟渡柳野舟車を引ふ 物振の音あり
上野の舟車を引ふ 舟車を引ふ 舟車
舟車を引ふ 舟車を引ふ 舟車
舟車を引ふ 舟車を引ふ 舟車

② 1月18日

月一 日八十一

金曜 五乙

甲子五月六日 二た天
全額送附(十八番通)

日暮人の夜火船は、銀宗の聞名傳が己の船の如くして、
て自ら三個の舟として送附したる事である。大抵銀宗の
上野の舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車
舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車
舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車
舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車
舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車を引ふ舟車

吉一正三致九果 四 一自四致五果自七赤八白

吉田 太郎 (高橋)

